

京都府芦生研究林で再発見されたキイロスッポンタケ

赤石大輔・佐久間大輔

(京都大学フィールド科学教育研究センター・大阪市立自然史博物館)

京都府内では 1972 年に確認されて以降確認がなく、絶滅種とされていたキイロスッポンタケを、京都府南丹市美山町の京都大学芦生研究林にて 2020 年 6 月 5 日に芦生のエコツアーガイド 2 名とともに発見した。府内では 1972 年の記録から 48 年ぶりとなる。

キイロスッポンタケ *Phallus flavocostatus* Kreisel はスッポンタケ目スッポンタケ科に属する菌類で、柄部は淡黄色から黄色、広葉樹朽木より発生することが知られている。分布は北海道、本州、四国、九州、世界では中国大陸、スリランカ、インドネシアとされている(今関・本郷 1987)。

京都府レッドデータブックでは 2002 年度版から絶滅種として記載されていた(京都府自然環境保全課(編) 2015)。国内各地の発生状況を調べると、サイエンスミュージアムネット (<http://science-net.kahaku.go.jp/> 2020 年 12 月) には北海道 5 点、山形 2、栃木 1、群馬 4、茨城 1、埼玉 2、山梨 1、石川 2 と、兵庫県 1 そして飛び地的に鹿児島県屋久島が掲載されている。このほかの記録を調べたところ、熊本県菊池市菊池溪谷(塩津 2015)、愛媛県皿ヶ嶺(沖野 1998)、高知県越知町横倉山(近安 1995)、奈良県(川上村三之公、大塔村赤谷、上北山大台ヶ原)、兵庫県 1 地点(芳賀町音水)といずれも冷温帯の産地である。

一方、京都府の既知の産地は、京都府レッドデータブックの菌類を担当した吉見昭一自身の採集した京都市内の下鴨神社のシイ倒木上から発生したという記録である。この吉見の報告から 30 年間新たな子実体の発見がなかったことから、絶滅種と判断された。

本種は 2020 年 6 月 5 日に京都府南丹市美山町の京都大学芦生研究林内で再発見された。芦生研究林の「ブナの木峠」の林道沿いで、エコツアーガイド 2 名とともに本種を発見した。ミズナラかブナの腐朽の進んだ広葉樹の倒木上から 6 本が群生していた。標本は OSA-MY-7318 として大阪市立自然史博物館に寄贈した。

同定は、糟谷ら(2007)の検索表に従った。ヒメスッポンタケ *P. tenuis* (E. Fisch.) Kuntze との区別として、本種の托(receptaculum)はクリーム色～淡黄色であるに対して、ヒメスッポンタケは鮮黄色である点(糟谷ら 2007)が異なる。本種の担子胞子は楕円形から長楕円形で $3.5-4 \times 1.5-2 \mu\text{m}$ 、一方ヒメスッポンタケの担子胞子は楕円形で $3 \times 1-1.5 \mu\text{m}$ である。採集した個体の托は淡黄色であり、胞子は楕円形で、顕微鏡下で計測したところ、 $3.1-4.0 \times 1.4-1.8 \mu\text{m}$ であった。また本種子実体の托の泡状組織は 2、3 層であるのに対して、ヒメスッポンタケは 1 層の泡状組織からなる(今関 et al. 2011)。採集した個体の托の断面を確認すると 2、3 層の泡状組織が確認された。

以上より、採集した個体をキイロスッポンタケと同定した。観察の経緯と市民科学・保全上の意義について報告する。